

## もっとも幸せな時間

栗田家の暮らしでは、あらゆる身の回りのものを自分たちで調達することが当たり前だった。買い揃える余裕がないこともあるが、それぞれに適した材料から用途に見合ったものを作り上げる。知恵と工夫にあふれた時代だった。

さて、どこの家にもある布団だが、栗田家では布団も家で作るものの一つだった。秋の米の収穫が終わった後、稲の藁をすぐると出てくるクタダラ（くず）を使い、いつも姉たちが藁布団を作ってくれていた。藁の茎の部分を少しと、あとは葉の部分を沢山詰めて作る布団。それを“くず布団”と呼んでいた。それがなかなか柔らかくて暖かいものだったという。

寒くない時期の寝具は、ある程度簡単なものでまかなえる。一番は冬の暖をとらなくてはならない時期だった。どうしても最低限の寒さはしのがなくてはならない。栗田家では冬用はかなり大判の布団を作っていたようだ。大きな“くず布団”1枚に、家族7人が足を真ん中に寄せて放射線状に眠る。それが、栗田家の冬の寝床の形だった。真ん中にアンカを置くと、みんなが足を温めることが出来る。さらに、それぞれの足の温もりも加わり、何とか寒さをしのいでいたのだろう。効率的と言えなくもないが、しかし伸び伸び眠れたとは思えない。こうした生活は、サキノが中学に入る頃まで続いていた。

サキノの母親は栗田家に後妻で嫁いだ人だった。嫁いだ後に、3人の子を授かった。目に見えない苦労も抱え、体は思うように動かないながらも、口と頭はしゃっきりと采配を振るう日々。子供たちにもやることをやれば叱ることもなかった半面、褒めることも全くしない人だった。

栗田家の家族が眠る時、いつもそれぞれが同じところで休むことが決まりだったのだが、サキノの位置は必ず母親の隣と決まっていた。その時だけが、誰にも遠慮なく母のそばにいられた時間だった。この時間が、サキノがもっとも幸せを感じた時間だった。

「布団をふっかむりすつと、必ず、おがぁがギュウって抱きしめてくれてなあ。“サキ、にし（お前）にはひでえ目くわせてばかりだが、ほんによーく頑張ってくれてんな。せつねえ時あっても、こうやって頑張ってることは、いずれ必ず為になる時くっかん。辛抱して頑張ってくろうな。”って、毎日布団の中で言ってくれるもんだっけ。その時間がなにほど嬉しくて嬉しくて、忘れられねえ思い出や」。

この時が初めて子供らしいサキノを感じた瞬間だった。

サキノの話は聞けば聞くほど、なんと男勝りであっけらかんとしているのか、と思うことばかりだった。でも、やっぱり母に甘えたい。母に褒められたい。その思いを耐えながら頑張っていたのだろう。この瞬間があって、サキノは頑張ることが出来たのかもしれない。

「昔のくず布団では、なにほどあったかい布団だったぞ。あのフワフワしたあったかさは、今の布団もかなわねえべな」。

サキノにとってもっとも幸せな時間は、母にとっても愛を伝えられる唯一の幸せな時間だったのだろう。くず布団の温かさは、母の温かさそのもの。そこにあったのは、親子にとって特別の時間だった。